



樂音寺庫裏上棟式の「餅まき」に大勢の方々が来てくださいました

樂音

佛歴二五六六 西歴二〇二三
令和五年四月号

発行 樂音寺 住職 内藤睦雄
電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (お寺)

FAX 0553-47-3495 (只今使用不可)
寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

四・五月の予定

四月八日 お釈迦様の誕生日

十三時より甘茶を差し上げます 入れ物をお持ちください

二十五日 清水新定院鶴飼隆晴和尚津送

二十七日 御詠歌青鳳会講習会(本山)

九・二十三日 坐禅会 朝六時三十分

五月十三日 笛吹市御坂町廣徳寺先住一周忌

十九日 愛知西教区発展拡充大会

二四〜二六日 沖繩教区寺庭婦人講習会

三十〜三十一日 無相教会師範会

十四・二十八日 坐禅会 朝六時三十分

おかげさまの上棟式

前日は暖かい雨、当日もそれまでの菜種梅雨が、餅まきの寸前から小止み。盛大に、それも地元の方々が大勢来てくれて賑やかに、庫裡上棟式・餅まきが行われました。高い所からお餅を始め、たくさんのものをまいて、それを、お配りしたバケツに一杯になるまで入れていて、まく私は途中で涙が出るほどに嬉しかった。皆さんのこの気持ちのおかげで今日があるなどという思いでした。ありがとうございます。

今月の掲示板

春宵(しゅんしよき)の

此の一刻を

惜しむべし

この一年は早かった。

一つ所に止まっていると余計なこと頭いっぱい



になりそうなので回遊魚よろしく、目いっぱい動いてきた、だから早い。数日前「楽音」を配り終えたばかりにもう次の号、これも早い。感覚的に、寝たらずぐ起きて、起きたらすぐ寝る毎日、これが早い。でもよくよく考えるに、周りの野の花・人の顔・言葉がよく目耳に入りやすい自分を感じるところを見ると、周りの世間はもっと早いかもしれない。私自身の歩み自体は年齢相応と言えるのかも。

惜しむべし得がたきはこの一刻、光陰矢のごとし、命短し恋せよ乙女。熱き血潮の冷えぬ間に、心の炎消えぬ間に。いくつになっても青春真つただ中、過ぎ行く今を惜しむ句です。私の独断で、日本史上、最も日本文化が栄えたと思われる大正昭和を生き抜いた、俳人高浜虚子の句。おそらく中国宋代に活躍した書家であり文人の蘇拭の詩『春宵一刻值千金』が下敷きにある作品だろう。

和敬清寂

お茶が鎌倉時代に、栄西によって中国からもたらされて以来、禅宗の思想を反映させて広まって行くことになる。しかしそれは次第に華美なものとなり茶の湯は特権階級が嗜むものとなった。それを心を養い、精神的な道に昇華させてきたのが、足利義政のお茶の先生でもある村田珠光。一休禅師について禅を学んだ彼は「お茶事では『和敬清寂』を旨とす」相手に礼を尽くし、穏やかでなければならぬと説いた。この珠光ことによつて、千利休が茶道を完成させた流れである。



『和敬清寂』は四文字熟語の禅語であるが、『和敬』の行動・心境を起すためには『清寂』であること、不動の穏やかさを保つこと、これが重要

ではないだろうか。キーワードは『清』であろう。物も場所も清かれと、それは当然。大事なことはそれを手にし、扱う人の心こそ、清きが上に清かれ、と祈ることである。

臨濟寺専門道場の生活

道場で何が楽しみと言って、やはり三度の食事である。しかし基本、朝食(粥座)は粥に沢あんの古漬けと梅干し、昼は齋座と言って飯汁菜、麦飯とみそ汁、菜はいわゆる一品、夕食は薬石、昼の飯と汁に少し野菜など加え合わせた、いわゆる今風にはリゾット。「雲水日記」なる道場紹介本での予備知識があったので驚きはしなかったが、それまでの食生活とは比較にならない。でももしかしたら、非常に健康的な食事だったかもしれない。

加えて食事中、音を立てるな、かまずに飲み込め、早く食え。「いやいや嚙まなければ満腹中枢が…」なんて言おうものなら…。

道場の粥を『天井粥』と呼ぶ。どんな高級粥かと思いきや、天井が写るくらいのもうすいたとて、湯を足せば事足りるということらしい。

そして極め付きはマイ食器の持鉢、五枚ほどの重ね茶碗だ。



食事の最後にやかんでお茶が注がれるが、残した沢あんとその少しのお茶で茶碗も箸も洗って布巾でふき取るのみ。それは不衛生、と思うかもしれないが道場での食中毒など聞いたことがない。



密(しきみ)の花

上棟式に当たって棟札を書かせていただきました和尚の名と再建工事の由緒。裏面には棟梁・設計者を始めご縁の業者名が記されています。

二階部分と西側南側の瓦はすでに乗っていて、まことに勇壮に見えます。
棟梁曰く「見えるところはすべて桧材をつかっている」とのこと。それも山梨県内産であることを嬉しそうにお話しされていました。

